

	<p>2017年 3月15日 第119号</p> <p>発行：いたばし水と緑の会事務局</p> <p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会 <a href="http://mizumidori2.eco.cocacn.jp">http://mizumidori2.eco.cocacn.jp</a> E-mail : <a href="mailto:mizumidori@nifty.com">mizumidori@nifty.com</a> 〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&amp;fax3969-7124</p>
---	---

## 板橋付近水辺の思い出

子供の頃に遊んだ水辺と生き物の思い出について書いてみたい。前にも書いたことの繰り返しになってしまうかもしれないが、歳のせいということで勘弁してほしい。

### 戸田ボートコース(現戸田市)

幻となってしまった戦前の東京オリンピックのために造られたボートコースである。荒川合流点直前の笹目川から水を入れ、戸田橋付近に水門があり、ここから下流荒川合流点までが菖蒲川(当時のこの川の名は知らなかった)である。

昭和30年頃、コンクリート製のボートコースの縁はあちこちで崩れ、湾のようになっていた。透き通った水辺は浅く、子供たちが四つ手網で小魚を絶好の場所だった。

浅い所では裸足になり、水際を覆う草に隠れている小魚を追い出し、四つ手網に追い込む。当たれば大漁、誰かがやった後などは何も捕れないことが多い。獲物はタナゴや小さなクチボソ、メダカも入るがこれは相手にしない。

急に深くなるコンクリート縁の外側では、四つ手網を底まで沈め魚を誘き寄せる。釣道具屋で買った蛹粉を粘土(これは現地調達)に混ぜたものが魚を集める餌だ。こちらの方が追い込み漁より大物が捕れる。とはいえ、所詮はクチボソ、たかがしれている。

ビン胴にも同じ寄せ餌を使う。薄いガラスで出来ているので直ぐ割れてしまい、泣きべそをかくことになる。当時の子供には高価なものだった。後にセルロイド製(セル胴)になり壊す心配が無くなった。入る魚は沈めた四つ手網と同じで、クチボソとダボハゼが多かった。たまにオカメタナゴが入るとうれしかった。セル胴の写真はインターネット上で見つかった。構造は同じだが形は昔のもの(当時のビン胴とほぼ同形)と少し違う。ビン胴の写真はネット上でも見つからない。昔からある竹などで作る筈(ウケドウ)をモデルにしたものであろう。筈は今も残っているが、ビン胴は忘れ去られようとしている。まがい物、子供の遊び道具(当時駄菓子屋で四つ手網と一緒に売っていた)の宿命であろう。

ついでに四つ手網の形も書いておこう。四角い底の網に壁網が三方ついて、取っ手の十字部分は竹の筒に通してあった。前方に壁網が無いので、追い込みが基本的な使用方法である。田んぼなどの小さな水路で使うことを想定した形であろう。新河岸川で仮小屋を作り魚を捕っていたプロ?は壁網が無い大きな四つ手網を使っていた。寄せ餌を使う方法で、大きなコイやフナがかかるのを見て羨ましかった。川にせり出した木組みの天辺にロープを通し、網を沈めたり引揚げたりしていた。

釣り道具も用意していく。釣り針はハリスが付いているもの、ハリス留め(当時はこんなもの知らなかった)などは使わず直に道糸と結んだ。おもりは板ナマリ、ウキはトウガラシウキ(木製で細長い)を使ったが、セル玉ウキも使ったかもしれない。竿の先端と釣り糸をどう結んだのか、これは記憶に残っていない。釣竿は篠竹(多分アズマネザサ)で現在の赤塚公園東端の水路際まで採りに行ったりした。もちろん一本竿なので電車に持ち込み怒られたりしたはずだがこれも記憶がない。

**当時捕った魚について** ( )内は標準和名

**クチボソ(モツゴ)**: 当時の東京周辺平野部で子供たちの釣りで犠牲になった代表の魚、簡単に釣れるので大人は相手にしなかった。現在も普通に生息するようだ。近似種シナイモツゴの関東南部における確実な記録は戦前のものだけ、現在は関東全域で絶滅。

**タナゴ(学名 *Acheilognathus melanogaster*)**: タナゴ類は口が小さいので釣るのは難しい。子供たちは四つ手やビン胴で捕まえた。タナゴ類は同定が難しいが、私たちが捕っていたのは体形(体高が低く細長く見える)からみて多分本種、色は同様だが少し体高が高かったのはタイリクバラタナゴの未成魚だったようだ。ヤリタナゴなども混じていたかもしれない。現在本種は東京都、神奈川県、埼玉県で絶滅、原因の一つとして産卵場所(タナゴ類はすべて生きた二枚貝の殻内に産卵する)を巡るタイリクバラタナゴとの競合が考えられる。

タナゴ釣りは非常にマニアックな釣りでタナゴだけ釣るといふ人はいても、タナゴも釣るといふ人は少なかったと思う。私も一通りの淡水魚釣りはやったがタナゴはやったことがない。竿は鯨の鬚を穂先に使い、浮きや針も専用のもので釣り道具入れも凝ったものだった。釣り餌は玉虫(イラガ繭内の前蛹期幼虫、年1化で秋から春が前蛹期だったと思う)が主に使われ、餌を針に付けるのも難しそうだった。1970年代私が通っていた大山の釣道具屋に時々玉虫が入荷していた。需要はあるが玉虫が減ってしまい、常時在庫とはいかないという話だった。イラガ減少の主原因は寄生蜂と言われるが私は複合的なものと考えている。

**オカメタナゴ(タイリクバラタナゴ)**: 透き通った青に赤みが差し捕れるとうれしい魚だった。浅瀬でじゃぶじゃぶやってもオカメは捕れない。深く沈めた四つ手やビン胴に入る魚だった。捕ってきた魚は金魚鉢で飼ったりしたが直ぐ死んでしまった。ブクブク(エアポンプ)などは一般家庭に無い時代だった。

本種は中国大陸からの移入種で、西日本に分布する在来のニホンバラタナゴとは別亜種の関係になる。日本に入ってきたのは1942年、葛飾区水元の水産試験場に届いたソウギョ等の中に混じていたという。その後数年の間にほぼ全国に広がったらしい。戦中の食料増産運動の置き土産といえる。ゆっくりと流れる大河でしか繁殖できないソウギョの分布は限られるが、タイリクバラタナゴは各地でタナゴの代役となりタナゴ釣り人の相手をしている。本種は在来のニホンバラタナゴと交雑し、純粋のニホンバラタナゴは絶滅の危機にある。

**ダボハゼ(ヌマチチブ?とトウヨシノボリ?)**: クチボソ釣りの外道である。クチボソも大人の釣り人には外道以下の扱いだったが、ダボハゼは子供たちの間でも最下等だった。いくらでも釣れるし、針は飲み込むはで嫌われ者だった。

ヨシノボリ類とチチブ類は分類上では属が違い体形も大分違うが、当時の私はダボハゼの小さいうちがヨシノボリ類だと思っていた。魚捕りの相手にはしなかったが、澄み切った水の中、青や朱色のヒレをきらめかせコンクリート縁をへばりつくように泳ぐこの小魚の印象は深い。

釣巻岳人

# 都会の自然へのお誘い

春ですね。地面の緑色があざやかです。1月7日には七草粥を食べる習慣があるので、1月頃から春の七草は出ているはずですが、地面の緑に気づくのはいつも七草粥が終ってから。春の七草も本当は旧暦の1月(太陽暦の2月)の方がぴったりな気がします。ついでに春の七草は、セリ、ナズナ、オギョウ(ハハコグサ)、ハコベラ(コハコベーハコベの仲間)、ホトケノザ(コオニタビラコ)、スズナ(蕪)、スズシロ(大根)です。春にかわいい花が咲くホトケノザは食べられません。

今頃になるとハコベやナズナもハハコグサも出てきます。地面の緑はみずみずしく、春を感じますね。草萌えという言葉が実感できますね。3月にはナズナ(ぺんぺん草)に似たタネツケバナの花も咲きます。この時期に田んぼでは種まきの準備をします。種籾を水につけて発芽しやすくしてから撒くそうです。種を水に漬ける頃に咲く花なのでタネツケバナ、季節が感じられるいい名前ですね。



ちょっとした土に春の花に出会うと楽しいですね。ゆっくりゆっくり歩くと道ばたや空き地に春の野草が見つかります。つくしもあるところにはありますよ。

いたばし水と緑の会では、公園管理者の許可を得て、公園利用者の邪魔にならない一角にささやかな生き物のすめる自然の場所(ビオトープ)をつくり、生き物と共存できるまちづくりを目指しています。そして、東京のなんでもない空地や公園に小さな動植物が生きていることに気づき、とれもうれしくなります。「小さな動植物に気づくようになった」のは活動のなかでもらったものです。忙しがっていた頃には見えませんでした。

毎月同じ公園でも、花のない季節でも、何かしら季節の発見があります。いつも見ていると、



名前を知りたい(あの魅力的な人は誰かしら、と思うのと同じ)、どういふ暮らしをしているのか知りたくなります。

2月11日、日暮台公園の観察会、明るい陽差しの中で葉を落とした頭上の木(イヌシデ)の梢を見ると芽がふくらみ、メジロが2羽、枝から枝へ移り飛びながら餌を探していました。何を食べているのでしょうか。静かです。

よい公園環境づくりというと雑草を抜いて、きれいな花を植え、落ち葉を掃除したりすることと思われませんが、それは人間のための環境づくりではないでしょうか。

水たまりや草むらを汚いと思う人が多いですが、生き物たちの大切な生活の場所です。小さな動植物も私たちと大地を共有していること実感できたら、もう少し彼らに寛大になれるような気がします。

私たちが毎月観察している日暮台公園(前野町)は、まちなかにあります。板橋区は荒川低地に向かう北斜面が多いところですが、宅地に向かない北向きや急斜面が幸いして自然の樹林地が多く残されています。日暮台公園も平坦なところは区民の憩いの場所として整備されていますが、人が利用しない斜面には樹林ががらうじて残っていますが、木があっても、下草がなくなり土が流出して、はげ山になっているところもあります(写真下)。雨水を保水する力もありません。林内の下刈りを止めていただいてから6年以上経っていますが、裸地化は進むばかり。過去の刈り払い機による過度の下刈りが原因では？はげ山には子どもが来て滑り遊びをしています。

一方で、ごく狭い範囲ですが、下刈りを止めてから若い木の種が芽生え育っているところがあり、私たちはとても大切に思っています(写真下)。そこは高低差が小さく、土もあまり流出せずに残っていて、日の光も入り、発芽条件が整っています。隣に住宅がせまっているので、枝も切る



し、木が根元から切られたりすることもあります。林縁の落ち葉の掃除もします。が、ありがたいことに他の場所と異なり、ほどほどにされています。

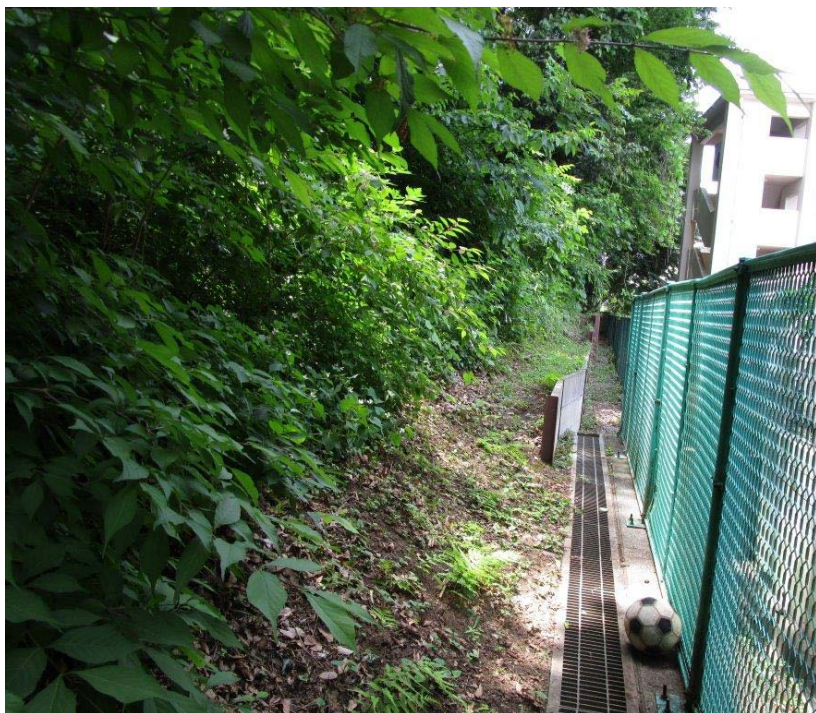
ここには造成した公園にはない野生の植物の種が眠っています。茂みが復活して喜んでいるのはヤマユリ。最初は葉だけだったのが花が咲き、株も増えてきました。他にも野草が芽生えて、花をつけたり、消えてしまったりと、いろいろ。



赤塚のニリンソウや清水山いこいの森のカタクリのように、ボランティアが年間を通して手入れされているおかげで毎年一面に見事な花が咲き、お花見の名所になっているところがあります。

この日暮台公園にも春にニリンソウが咲き、夏にキツネノカミソリが咲きます。区民が利用できない林縁は、下草刈りも少し大目に見てもらって、ひっそりと咲いています。自然が残されていることだと思います。

3月に行ってみたら、この公園も清掃された直後でした。この狭い場所以外は、木はあるけれど地面は土だけで植物はなし。雑草嫌いは増えているのでは？そしてエスカレートしているのでは？雑草を駆除する→少しでも残っていると苦情になる→雑草を駆除する・・・公園に行くたびに、ささやかなみどりの林縁はどうなったかとドキドキします。そしてなんとか無事だったとほっとして、観察が始まります(坂本郁子)。



2016年6月、公園の清掃下刈り作業後の様子。住宅がすぐ隣にあるので、枝が境界から出ないように枝切りされるが、下刈りは隣地境界に近い狭い幅にだけされている。

私たちはこの場所を守っていただいたことに、ここに住む動植物とともにとっても感謝している。

## 前野公園が老朽化で改修

前野公園の傍を通って、木がなくなって更地のようになったのを見てびっくりしました。春に真っ白な花を咲かせ楽しませてくれたモクレンもありません。ボランティアの方が育てていた花壇もありません。憤慨している人も多い。傍らには老朽化した前野公園を改修しますという看板がありました。桜やケヤキの大木は残されるようですが、「中途半端に年を取った木」(これも老朽化?)は切り倒されました。隣の前野小学校の子ども達はこれを見てどう思うのでしょうか。緑



地がリセットされて違和感を覚えながらも、慣れていくのでしょうか。公園作りワークショップに参加された方達は満足しているのでしょうか。

公園は子ども達が遊ぶ場所でもあります。草原も遊び場です。草や落ち葉が汚いとか、暗くてうっとうしいという（多分声高の）苦情がよく寄せられるようですが、公園緑地の多様な価値、都会の公園にもある「自然の宝物」を消し去らないでほしい。

建物は完成時に最も見栄えがよく中古は価値が下がっていきませんが（そうでない建物もあります）、公園は建物ではありません。公園の木もできてから少しずつ育ち、子どもや孫の世代に大きく枝葉を伸ばした「ふるさとの木」になる、そういう視点がほしいです。



## 前野公園で樹木の働きを調査した

いたばし水と緑の会では、2007年に、桜美林大学名誉教授の三島次郎先生に来ていただいて、赤塚公園で「樹木の働き」というテーマで講義とフィールドワークを受けました。翌年に三島先生に教えていただいた方法で、前野公園にある樹木が温暖化やヒートアイランドをどの位緩和するかを調査しました（写真右は2008年1月の前野公園）。

原理はこうです。植物は葉から二酸化炭素を吸収して酸素と水を放出します。こうして植物は地球温暖化の原因である二酸化炭素を減らし、また水を放出（蒸散）して気温を下げてくれます。植物が吸収する二酸化炭素の量や放出する水の量は、葉の面積に比例します。葉の総面積は、樹木の種類（落葉樹か、常緑樹、針葉樹など）と幹の太さから計算できるので、樹木の種類と幹周りを測定すると計算表から、葉の総面積がわかり、二酸化炭素吸収量や蒸散量がわかるのです。



私たちは、同じ木を重複して測定しないよう、測定し終わった木には目印のヒモを巻きました。そうして測定した高さ3m以上の木は197本ありました（次頁写真は調査のようす）。

葉の総表面積（葉を1枚1枚敷きつめると）は、78,040平方メートル（7.8ヘクタール）になりました（この値は自然の木の場合なので、枝を切り詰めたりすると葉の面積は減ります）。これだけの葉が吸収する二酸化炭素吸収量は163トン/年。

これは自動車が696,901km走ったときの二酸化炭素量にあたる。これだけの葉から水を蒸散するとき、気化熱を奪って空気を冷やす。その冷却効果は1年間でこれは家庭用クーラー6,490,338時間（クーラーの能力2500kcal/hourとして）1日8時間運転すると81万台

前野公園の木を切ってゴミにしていまえば、木がため込んでくれた炭素は二酸化炭素になって大気に放出されます。なお、夏になると、打ち水の効果が盛んにPRされますが、樹木や草など年中無休の自然の働きに比べると、打ち水の効果はほんの一瞬ですね。（坂本郁子）



## 環境なんでも見本市(2月4にち、5日)と いたばし・まちの環境発表会(3月5日)

環境なんでも見本市では、アメリカザリガニについて展示しました。クイズはザリガニの食害についてです。①水草を食べる、②オタマジャクシやヤゴを食べる、③魚を食べる(答え:魚は食べない)。さて、私の印象としては、ザリガニに無関心な人が多かったです。環境に影響が大きくても、生活に影響がないためでしょう。そこで、いたばし・まちの環境発表会でアメリカザリガニとどう付き合うかというテーマで発表し、トンボ池でのザリガニの捕獲調査結果や、水草や水生生物の食害を報告しました。

## 梅まつりにカエルが来た

今年の梅まつりは3月4、5日に開催された。1週間繰り上げられ、梅はちょうどよく咲いていて、それほど寒くなく人出も多く、私たちのコーナーもたくさんの方が来ました。池に湧水が流入し、橋が修理され、棚田にほどよく水が溜まり、好条件の中で、カエルが20匹来て、泳ぎ回り、大人も子どもも見とれていました。ほっとする光景だったのでしょう。そして池底に紐状の卵を大量に残していくでしょう。しかしもうザリガニも出てきているようです。ここから何匹がカエルになって上陸できるのでしょうか。





# 活動のお知らせ

## 平成29年度(2017年度)総会のお知らせ

いたばし水と緑の会21回目の総会です。楽しみ、新しい発見があり、大切な城址の自然を次の世代に引き継いでいけるような活動を目指します。

日時：4月22日(土) 11時～14時

場所：三園1丁目集会所(板橋区三園1丁目-36-6) 最寄り駅：西高島平

大宮バイパス側道からファミリーマートのところに入り、最初の道を右折し突き当たりです。地図が必要な方は坂本まで(090-4618-1295)

運営委員会：3月25日(土) 12:30～13:30

作業・観察会の後に報告や活動内容などを相談します(ラーメンしらかば)。

連絡先：坂本(090-4618-1295)

●会報の発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：5月20日(土) 12:30～

活動の問い合わせは事務局 瀬田(3969-7124)まで

### 活動予定いろいろ

1 赤塚ピオトープ(赤塚トンボ池、大仏下ミニトンボ池、バッタ広場)の環境整備と観察。  
集合はいずれも赤塚トンボ池前(板橋区立美術館そば)

バッタ広場ではササを刈り、木を切り詰めるなど。トンボ池では、苦勞して掘った浸透穴が機能しているようです。そろそろザリガニも出てきます。

3月25日(土) 10:00～11:30 バッタ広場、ササ刈り、木の切り詰め

4月15日(土) 10:00～11:30 城址周辺の観察会

4月22日(土) 10:00～10:45 トンボ池点検(そのあとは総会です)

5月20日(土) 10:00～11:00 未定

2 日暮台公園樹林地の観察プラスα((樹林地内の推移と林縁植物を観察、ゴミ拾い等)

4月1日(土)、5月6日(土) いずれも10:00～11:30

日暮台公園前集合

● いたばし水と緑の会のURL

<http://mizumidori2.eco.coocan.jp>